

# 草庵仏教

第217号  
(発行日)

2008年7月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

## 《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月2日と

12日。午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 宗教儀礼の意味

仏教徒の生活とは具体的に日々宗教儀礼を行う生活をするということである。これが仏道修行の基本的な姿である。

修行というと、僧侶だけが行うものであるとか、あるいは難行苦行をイメージするが、それだけが修行ではない。むしろそういう修行は特殊な行であり、だれも行える行ではない。

そうではなくて、日々の中でだれでもが「行を修する」(修行)ことのできるもの、行われるべき修行が、それが仏教の宗教儀礼である。

では何が真宗門徒の宗教儀礼かというと、お念仏申すこととであり、朝夕の勤行である。このことは古来、真宗門徒のたしなみとして広く行われてきたものであり、これによって日々の生活に秩序が生まれるのである。朝夕の勤行は、朝起きてお勤めを夕方にもお勤めをすることである。お勤めの内

容は、礼拝し、念仏し、正信偈(あるいはお経)を勤行し、勤行の後、御文や歎異抄などのお聖教を拝読し味わうことである。また夕方にも朝に準じたお勤めをする。そして朝夕の勤行以外はお念仏に親しみつつ、仕事や家事などをこなしていく。そういう単純であるが秩序のある生活を毎日続ける。これがみじかな仏道修行である。

お内仏(お仏壇)はこういう宗教儀礼をするためのものであつて、単に先祖の供養をするためのものではない。亡き先祖は、生きている私たちに仏法に帰依して人生を送ることを願っておられる諸仏として敬い、仏前において亡き人と共に阿弥陀仏の徳を讃歎する勤行を行のである。それが亡きご先祖のお心にかなういとなみになるのである。

こういう宗教儀礼を日々持つことは、少く努力のいることであつて、いわゆる「おつとめ」なのである。

こういう行いの効用は目に見えるものではないが人生に安定をもたらすものである。しかし「勤行によって仏様のおかげをいただき病気が治った」とか「勤行しているので商売が繁盛してきた」などと、儀礼の効果や利益を求めたり期待したりするのは、自己中心的な願望をかなえようとしているのであつて、純なる仏教の行とはいえないのである。

むしろ、自分に都合の良い御利益を求める必要もなく、求めることもなくなっていくのが、仏教生活である。

仏前にぬかづき、仏教儀礼を修することによって、さまざまな困難や障りがやってきても、仏とともに生きぬき、いろいろな困難に随順しつつ、それらをかえって善き仏縁に転化していく、そういう智慧のまなこを養っていたのである。

儀礼のある生活をするのは、私たちが弱い人間であり、悪に傾きやすい人間であり、ふしだらになりやすい人間であることを自覚するからである。自分をほっておくとだらしなくゆるんでしまうようなお粗末な人間だから、宗教儀

礼により、日常生活にわくをはめていただくのである。それによって、ふらふらしやすい人生生活であるがなんとか山坂をこえさせていただくのである。外から自分の生活を規制し、秩序づけられて、やと人間の生活にもどしていただく、そういう働きが宗教儀礼にはあるのである。

宗教儀礼をとり入れた生活をするにはいつでもどこでもできるのである。私ができることはささやかであつても、それが次第に子や孫にも影響を与え、やがて社会全体にも浸透していくものと思う。

なお、専ら念仏申す生活であれば、それには宗教儀礼の意義はすべて含まれてくるであろう。(了)

## 《盂蘭盆会法要》

8月10日(日)

午後2時始まり

念佛寺にて

\*8月22日の「同朋の会」は休みます。

# 正信偈に学ぶ問答

(六六)

## 法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所

親見諸仏浄土因

国土人天之善悪

建立無上殊勝願

超発希有大弘誓

(正信偈書き下し)

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、

諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を親見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

\*

A 「法蔵菩薩は一切衆生を浄土に生まれさせてまことの仏にしてやりたいという広大な願いをおこされ、そして『無量寿経』によると

不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植して

とあって、永劫のご修行をされて阿弥陀仏に成られたと説かれています。永劫の修行というのは、ここまでという限りのないご修行ということ

すね」

D 「ええ、そうです。永劫というのは永遠といってよいほどの長い時間をいいますからね」

A 「すると、永劫の修行ですから、今もご修行の最中ということになりませんが、にもかかわらず、すでに阿弥陀仏になつておられるのはどうしてでしょうか」

D 「法蔵菩薩は単なる人ではなくて、久遠の阿弥陀仏が一切衆生を助けるために菩薩の位としてその働きをお示しになつた、そのような菩薩です。法蔵菩薩は一切衆生に代わつて永劫の修行をなされ、永劫の修行に於いて、阿弥陀仏としての徳を、一切衆生の往生の功德として完成された、と聞かせていただいています」

A 「そうすると、法蔵菩薩の修行が(終わって)ではないのですね」

D 「永劫の修行が終わつてというよりは、永劫の修行に於

いて阿弥陀仏に成られたのでありましょう」  
A 「なぜでしょうか」  
D 「法蔵菩薩の修行は人間の行う有限な修行の積み重ねによつて完

成していくような修行ではなくて、すでに仏であるお方がなしたもうご修行ですから、修行中のままが完成している、成就しているままが修行中といえましょう」

A 「永劫の修行ですから今も修行中であるままが、すでに仏の徳を完成しておられるということですか」

D 「そう私は聞いています。さきほど申しましたように、法蔵菩薩は、仏でありながら菩薩として修行をされる位に降りられたお姿です。そのおすがたは、たとえていえば、お月様は三日月の時でも半月の時でも、そのままが月の全体と離れないように、三日月だからといって一部分の月ではないですね。一部分に見えるままが裏は満月ですから」

A 「法蔵菩薩として願をおこし行をされたという経説は深い意味があると思いますが、なぜ法蔵菩薩として一切衆生を助けたという願を發し修行をされたのですか」

D 「法蔵菩薩の出現は久遠の阿弥陀仏が一切衆生を救う大慈大悲のまことを私どもに知らせ与えるためとうかがうことができません。それゆえ、一切衆生を助けようとの大悲を私たちに知らせるときは、へ一切衆生、もし浄土に生まれな

いようなならば仏にならな(い)との誓いとしてお示しになりました。それを聞いて私たちは阿弥陀仏の大悲のお目当ては全ての衆生にかかつているのであって、いつの時代のどのような衆生もおもらしのない大慈大悲のお心であることが知らされます」

A 「では法蔵菩薩が阿弥陀仏に成られたというのはどういう意味ですか」

D 「それは、私たちは法蔵菩薩がすでに阿弥陀仏になつておられるということを聞いて、一切衆生を助けたいという大願をすでに成就され、一切衆生を助ける功德を完成されていること、そのお知らせを聞かせていただくことによつて大悲の確かさを知り、阿弥陀仏をたのむ信心が起ってきます。もし、まだ法蔵菩薩が修行の途中であつて、いまだ阿弥陀仏になつておられないなら、一切衆生を助ける

という願いは完成していないということですから、法蔵菩薩の大慈大悲に對するゆるぎない信頼は起こつてきません。すでに阿弥陀仏になつておられることを聞いてこそ、こんな私も助けていただけるといふ信心が起こるのです」

A 「永劫の御修行ということですから法蔵菩薩は今も修行中ともいえませぬ」

D 「ええそうです。そのご修行と弥陀の救済とは別なものではないでしょう。法蔵菩薩の修行は利他の修行が中心です。利他の修行とは衆生を救うて浄土に生まれしめる行ですから、それは阿弥陀仏の衆生救済の利他の働きにほかならないでしょう。ですから、現に阿弥陀仏が衆生を救済しつつあるということは、法蔵菩薩の利他の修行が今もなされつつあると味わうこともできましょう」(一)



拡大する場合は画像をクリックしてください

# 信心をいたただく道

いかにしてまことの仏（神）にであうことができるか、ふれることができるか。その道を提示しているということは、真実の宗教にはあるはずである。

では「真宗ではどうしたら仏にであうことができるか」とあえて問うてみる。

そうすると、そういう問い自身がすでに計らいであり、自力であるという批判が当然起こるのであろう。

しかし、もしまことの仏にあうという手がかりも道もないとするなら、私たちは最初から途方に暮れるしかないであろう。

そこでこの問いへのアドバイスを親鸞聖人のお言葉の中に探してみると、やはり手がかりがあるのであり、それは聞法者にとって大事な道しるべといえよう。

例えば『教行証文類』には**横超とは、本願を憶念して自力の心を離る、専修とは唯**

**仏名を称念して自力の心を離る、これを横超他力と名づくるなり**（法蔵館版真宗聖典）とある。自力の心を離れるには、本願を憶念することと専ら仏名を称念することだと、申されているのである。

では本願を憶念するとはどうすることであろうか。それについて聖人は『教行証文類』（信巻）に

**聞と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを聞と曰うなり。**

と仰せられていて、本願の生起本末を聞いて、疑いのないのを聞というたと述べられている。このご文から、本願を憶念するとは、本願の生起本末を聞くことであると了解することができよう。

そして聞いて疑いのなくなったのをまことの「聞」いわば信というのである。

そうすると、法蔵菩薩が本願を起こされたのはどのようなものためであり、何のために、またどのようにして、

その本願を実現して、その結果どうなられたのか、という阿弥陀仏の本願の起こりと結果を詳しく聞くこと、それが聞法であり、本願を憶念することである。それによつて本願にたいする自力の疑いがないことになることを「聞」の成就すなわち「本願を聞き開いた」ことになる、との思召しとかがうのである。

また「専修とは云々」との聖人の仰せは、自力の心を離れて他力の信心をいたただくには、専らただ阿弥陀仏の名を称念することをおすすめくださる。

いまだ真実の信心に至らぬ未信の者にたいして念仏を専ら称念することをおすすめである。

しかし、こういうおすすめに對して信心を強調するグループの人たちが「念仏に力を入れると、行じていることをたのみにしてしまうから、かえつて信心をいたたく邪魔になる」といわれることがある。確かにそういうおそれはないとはいえないが、親鸞聖人ご自身は未信の人に称名念仏をおすすめになつていたのである。ご『和讃』に

信心のひとにおとらじと

疑心自力の行者も  
如来大悲の恩をしり  
称名念仏はげむべし

定散自力の称名は

果遂のちかいに帰してこそ  
おしえざれども自然に  
真如の門に転入する

とあり、さらに  
不退のくらしいすみやかに  
えんとおもわんひとはみな  
恭敬の心に執持して  
弥陀の名号稱すべし

のご和讃も「もはや二度と迷わぬ身に速やかになろうと思う人はみな、本願の思し召しを常に謙虚に敬つてお聞きし、お念仏を称えよ」との意と伺うことができる。

た『ご消息』にも  
往生を不定におぼしめさん  
ひとは、まずわが身の往生をおぼしめして、御念仏そうろうべし。

とあり『浄土文類聚鈔』には

万行円備の嘉号は障を消し疑いを除く。末代の教行、専らこれを修すべし。

とあつて、名号には本願への疑いを消してくださる功德がこもっているから、「専らこれを修すべし」と教示されている。

であれば真実信心への道は本願をへりくだつてお聞きしつつ、つねに阿弥陀仏の御名を称えていく道といえよう。

なお基本的に大事なことは、この道に一途であることである。「なんとしても救われない」と専一に求めることがご信心がただけでないのは、この熱心さや真剣さが足りないからではなからうか。香樹院師が「これ一つ聞きつけずばおくまい、おくまいの心がゆるんだら、仏になる種を失ふたと思え」といましめておられるが、実際その通りであると思う。（了）

## 《休会のお知らせ》

左記の日の集会は休みます。

八月十二日（念仏会と共学会）

九月十二日（念仏会と共学会）

（なお八月二十二日は例年通りありません）

# 信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》五  
太字は松並さんの言葉。

\*

○妄念煩惱を取れば私が無くなってしまふ。妄念と煩惱に目鼻を付けたら、人間でがな。そのただ中から南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏と聞えて下さるだけ、呼んで頂だけ。

(お念仏が私の主になってくだされば、妄念と煩惱の心のほかに私がないことがいよいよ知らされる。しかし、煩惱の心に喚びかけてくださる南無阿彌陀仏は煩惱妄念ではない、大悲の真実である)

○ある師「私は日本中を仏法一つにする」と一生懸命になっている」と。

「そんなに力まなくても、我が家我が家でお念仏の柱を一本づつけずれば日本中に念仏堂が建つ」と。

(今、ここに来てくださるお念仏の邪魔をせず、お念仏が日常生活の場で磨かれてくれば、お念仏そのものの徳力で自然に仏法は世界に広まるのと。にもかかわらず、お念仏が磨かれるよりもお念仏を傷つけてしまいがちな私である)

○「阿彌陀如来のその昔、法蔵比丘たりし時、我等衆生の往生の業をさだめ給う時、布施、持戒、忍辱、精進等のもろもろのわずらわしき行をえらび捨てて、称名念仏の一行をもつて本願とし給えり。念仏の行者往生せずは我も正覚取らじと誓い給いて、その願満足して、十劫この方なり。何んぞ衆生の往生疑わんや」と。

仏様が、南無阿彌陀仏にて私の往生に疑いないと信じてござつたら、私があらためて信心つくる必要ありませんがな。仏様の信心一つでよろしいやないですか。そのまこと心が南無阿彌陀仏ですがな。それでも信心ほしいですか、南無阿彌陀仏。

(南無阿彌陀仏にて、衆生の往生を塵ばかりも疑いたまわぬ仏様の信心、まこと心が南無阿彌陀仏にこもつていゝ。汝を助けることに疑いないぞ、間違ひなく助けるぞ、助かるぞ、の南無阿彌陀仏)でございましたか、有難うございます。信心がいらぬということでもなく、信心を作れよでもない。ただ如来の仰せを聞く一つ)

○親は苦勞する子は樂をする 南無阿彌陀仏。

(如来法蔵様の五劫永劫の修行の元手があればこそ、このままなりで助けていただける。凡夫のままのお助けと聞けど、してくださった苦勞を思わぬ。

おはずかしいことである)

○仰せが仏法 聞え心は仏法でない。

(私たちが生きていゝのはいつでも今の瞬間(一念)であり、今の一念を外にして私は生きていない。その私に阿彌陀様がであいたもうのも一念においてであいたもう。その一念は仰せを聞く一念である。その一念の事実の後に、そのお助けを喜ぶとか、嬉しく思うとかいうのは凡夫の心持ちであつて、思ひの色づけである。それはいわば如来の通つた跡である。跡は仏法そのものではない)

親心語る言葉もつき果てて、ただだ仰いで、合掌。

(親心の深さ、ご恩の深さがまだまだ軽くしかいただけではない私)

○世の中の宝は、与えたら減る。お念仏は一人聞いても百人称えても減らぬ。流れるほど増してゆく。仏様は十方衆生を念仏衆生にする。仏様のお手伝ひした事になるから御礼報謝に受け取つて下さる、そなわる。それも仏様が称えさせて下さるのに。

(お念仏の宝は人に与えても与えても減らない、それどころか与えるほどお念仏の功德の宝は増ばかりであるとは有難い。お念仏申すままが自然にお念仏を人々に与えていることになり、しかもそのお念仏をお礼報謝と如来様は受け取つてくださる)

○電氣のスイッチは、押すだけで明るくなる。用いればよい。電氣を発見した苦勞を自分がやってみる必要はない。宗祖様の教えを後からゆく事である。聞くとは随うことで直である、受ける事である。南無阿彌陀仏は「スイッチ」をひねることもいらぬ。呼びずめである。

(自分は愚かであつても嘆く必要はない。愚かなものは、尊い先達のあとに素直についていけばよい。助けるぞの

仰せが南無阿弥陀仏。この南無阿弥陀  
仏を直ちに受けるだけ、聞くだけ。わ  
ずらわしき計らいあるべからずで、ひ  
ねることはいらぬ)

(了)